

# 郷土博物館・文学館だより



資料はすべて愛媛県美術館所蔵

## 特別展

# 「杉浦非水・翠子展 — たましい 同情から生まれた絵画と歌 — 」

# 開催中!

当館では、日本のグラフィックデザインの先駆者として知られる杉浦非水と、その妻でアララギ派の歌人でもあった翠子の展示を開催しています。二人は、明治41年（1908）に千駄ヶ谷町穂田（現在の神宮前五丁目付近）に居を構えて以後、渋谷付近に住み、伊達町（現在の恵比寿三丁目付近）に家を建てて暮らした渋谷ゆかりの芸術家です。

本展では、これまで紹介されてこなかった非水と翠子の合作を多数紹介しています。非水の日本画と翠子の歌には、若かりし頃の非水が翠子に宛てた「君は僕の同情者、僕は君の同情者」の言葉のとおり、二人の魂が込められています。



10月31日に行われた展示解説風景

12月12日（土）、26日（土）、平成28年1月9日（土）、それぞれ午後2時から30分程度展示解説を行います。

## 渋谷に電灯がついた日 —渋谷の電化—

現在の渋谷区の電化については、地域によって進み方が異なるばかりでなく、その詳細な記録は残されていません。ただし、『郷土渋谷の百年百話』（加藤一郎著）によれば、渋谷道玄坂に初めて電灯がついたのは明治42年（1909）のことであるといえます。それを裏付けるように、明治末の道玄坂や宮益坂の写真をみると、そこには電柱が写っており、この頃には現在の渋谷区にあたる地域で、電気が普及し始めていたことがうかがえます。

当時の一般住宅への電気供給は、今日のように電力会社だけではなく、電気鉄道会社もその供給をおこないました。そのため、新たに鉄道が敷かれたり、既存の鉄道が電化したりすると、鉄道の周辺地域の電化が促進されました。

たとえば、玉川電気鉄道が明治40年に渋谷から玉川まで開通すると、沿線の各町村に電力が供給されました。続いて明治42年には、渋谷を走っていた日本鉄道（現在の山手線）が電化し、明治44年には甲武鉄道（現在の中央線）が電化、さらに東京市電が明治44年に渋谷まで開通して、電気供給事業は一気に広がりました。

これらに先立つ明治38年には、東京市電気局は下渋谷（現在の渋谷区東3丁目）に火力発電所を建設しました。この電力が、市電に供給されていたようです。

また『ふるさと渋谷の昔がたり（第3集）』によれば、大正初期の山谷（現・代々木三・四丁目周辺）では、東京市電と東京電灯とが激しい顧客獲得競争を行い、どちらの電線か区別できないほど多くの電線が走っていたといえます。

この頃の渋谷は、まだ渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町の三町に分かれており、それぞれ都市化に違いがありました。三町とも、東京市に隣接していたため宅地化は進んでいましたが、明治末に鉄道の電化が相次いだ渋谷町や千駄ヶ谷町は、比較的電化が早く行われました。一方、代々幡町は少し出遅れたものの、大正8年（1919）の幡ヶ谷付近の写真には、甲州街道に電柱が写っており、この時期には代々幡町でも電化が始まっていたことがわかります。

電化は、街頭の照明にも影響を及ぼしました。東京市内の街頭の照明は、大正期まではガス灯が40%を占めていました。しかし、水力利用による大量発電や広域配電の実現によって電気が利用しやすくなり、さらにタングステン電球の実用化によって、電球の低廉化と高性能化が進みました。これにより街頭照明は、ガス灯から電灯へと大きく変化しました。

特に東京市とその周辺については、大正12年の関東大震災を原因とする火災の被害の教訓から、火災を起こす危険性の高いガス灯を廃止する傾向が強くなり、震災以降は、電灯が東京の明かりの主流となりました。



下渋谷の火力発電所（現在の渋谷区東3丁目）

## 名探偵・浅見光彦を生んだ内田康夫

テレビ番組の2時間ドラマでも人気があるミステリー。そこには、多くの難事件を解決するおなじみの主人公が登場します。

たとえば、東京都北区西ヶ原に住み、警察庁刑事局長を兄にもつお坊ちゃま探偵といえ、浅見光彦です。本シリーズは、さまざまな俳優が光彦役を演じながら息長く続けています。また、光彦のファンは全国各地にいて、軽井沢の浅見光彦倶楽部の会員は2万人を超えています。(浅見光彦倶楽部は本年3月31日まで)

この光彦の生みの親が、ミステリー作家・内田康夫です。内田氏は昭和55年(1980)に栄校出版社から自费出版した『死者の木霊』で作家デビューを果たします。当時、内田氏は、自らコピーを書き営業もしながら広告会社を営んでいましたが、当時の住まいは幡ヶ谷駅前にありました。

友人には「さそり座の女」などの作曲で知られる中川博之氏がいましたが、中川氏のマンションは代々木上原にありました。二人はこのマンションで将棋を指したり、ミステリー小説を内田氏が借りたりして交流を深めていました。

ミステリー作家としてのスタートにも中川氏関わっていました。毎回本を返すときに、内田氏がそれらの小説のトリックの甘さなどを批判していたところ、「だったら書いてみる」と中川氏に言われ、売り言葉に買い言葉で小説を書きはじめたといえます。

『死者の木霊』の主人公は長野県の飯田署に

所属する竹村岩男という魅力的な田舎刑事でした。本作品は翌年、『朝日新聞』の読書欄に掲載されたことが契機となって、内田氏は大手出版社から注目されることになりました。

名探偵・浅見光彦は、昭和57年に廣済堂出版から刊行された『後鳥羽院伝説殺人事件』に初めて登場します。その後『平家伝説殺人事件』や『佐渡伝説殺人事件』『高千穂伝説殺人事件』など、数々の浅見シリーズが誕生しました。

内田氏は広告会社の経験から、商品の売れる力はまず「品質」、次いで「イメージ」、さらに市場の「ニーズ」や広告である(『浅見光彦ミステリー紀行』番外編1)と述べています。

内田作品の魅力は、実際に作家の足で取材した情報が作品にふんだんに盛り込まれていることと、タイトルからもわかるように、その背景に日本各地の伝承世界が展開しているところにあります。

内田作品に旅情をかきたてられた読者は日本各地にいて、新たな内田作品を待っています。



内田康夫 『浅見光彦ミステリー紀行』第1集  
光文社 1992年

本書は浅見シリーズへの手引書であり、旅行ガイドブックでもある。



## 収蔵資料紹介

### ナイフ形石器

最大長 46mm  
最大幅 15mm  
最大厚 12mm



これは、旧石器時代に使用された石器の一種で、ナイフ形石器と呼ばれているものです。旧石器時代といっても後期旧石器時代、すなわち今から約三万年五千年〜一万五千年くらい前までの間に使用されました。

この石器は、石材(石核)を割ってできる剥片を使用しています。その剥片の鋭い縁の一部を刃部として残り、ほかの部分は調整を施してあたかもナイフのような形状にしているため、「ナイフ形石器」と呼ばれるようになります。この縁辺部を調整することを、刃つばし(フランチング)とも呼んでいます。

後期旧石器時代の人たちは、ものを搔(か)きとったりする「搔器(スクレイパー)」という石器を主に使用していました。そのほかに削器や彫器、柄に装着する尖頭器も使ってい

ました。ナイフ形石器は、尖頭器と同じように柄に着けて使用されていたようです。

ナイフ形石器は、使用される石材や刃つばしの仕方によって、いくつかの種類に分類されます。この資料のように、縦長の剥片を使用し、片側の縁全体と、もう一方の縁の下部を刃つばしし、刃部が斜めになるように作られたものが、「茂呂型」のナイフ形石器です。板橋区にある茂呂遺跡で最初に見つかっており、その後、関東や東海地方にかけて出土しています。このほかに、中部から東北地方にかけての「杉久保型」、近畿や中国・四国地方の「国府(こくふ)型」、東北・北海道地方で出土する「東山型」などがあります。この資料は、渋谷区98番遺跡である北青山遺跡から出土したものです。ガラス質黒色安山岩で作られています。

#### 【今後の展示予定】

##### ◆特別展「杉浦非水・翠子」展

平成 27 年 10 月 24 日 (土) ~

平成 28 年 1 月 11 日 (月・祝)

##### ◆企画展「描かれた渋谷」

平成 28 年 1 月 19 日 (火) ~

3 月 27 日 (日)

##### ◆企画展「第 16 回渋谷現代短歌優秀作品展」

平成 28 年 4 月 1 日 (水) ~

4 月 10 日 (日)

\* 第 16 回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIRUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00 ~ 17:00 (入館は 16:30 まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方・障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.30

平成 28 年 1 月 7 日発行